

たどり着いたシンプルな土づくり



1 地区名

むつ市大曲

2 取組主体

蝦名 正雄



3 地域の概要

当地域は水産業、林業が盛んな地域であるが、夏季冷涼な気象条件を活かし、酪農や肉用牛のほか、だいこんやキャベツ、ながいも等の野菜の栽培も盛んである。近年は施設利用による夏秋どりいちご、トマト、ほうれんそう等の作付が拡大している。

4 取組内容

(1) 取組の背景・経緯

蝦名氏は青森県営農大学校で修学した後、昭和61年頃から両親の経営に本格参入した。それまで労働事情等から堆肥等の施用は控えめであったが、正雄氏は参入を機に、土づくりに力を入れることが重要と考え現在に至っている。

転作作物として施設（ビニールハウス）を利用したトマト、きゅうり栽培に取り組んだが、ほ場の排水性や土壌改善を図る必要があった。

(2) 取組の状況

施設栽培に取り組み始めた昭和50年頃、堆肥センターが下北管内に整備されておらず、家畜ふん堆肥の入手が困難で、機械等の整備も不十分であった。

そこでハウスの付近に自ら堆肥盤を整備し、管内の肉用牛農家から購入した堆肥を調製した後利用している。

しかし、施設栽培（ビニールハウス）で長年（30年程度）連作してきたため、肥料成分が残り、土壌中のバランスが崩れているのではないかと心配があった。



整備した堆肥盤

(3) 取組のポイント

土壌分析結果と作物体診断により、必要な成分を補えられるように養液土耕栽培を取り入れ、土壌中の肥料成分の適正化と肥料費節減に取り組んでいる。

5 栽培概要

(1) 土づくり・施肥管理のポイント

定期的な土壌分析を参考に、牛ふん堆肥（肥育牛のふん尿に副資材としてパーク混入）とぼかし堆肥を中心とした土づくりを行った上で、過剰になりすぎない程度の基肥を施用している。

(2) 土づくりのポイント

① 植物が元気に育つこと、つまり、病気に強い作物に育てることである。そのために、土に適度な空気が入り、根が栄養を効率的に吸収できる状況を作れるように努力している。



- ② 施設栽培における温度管理等をコスト面から考えると、収量を求めるよりも面積で対応する方が下北地域に合っているのではないかと考えている。
- ③ 土づくりに対しこれまで様々な取組を行ってきたが、費用対効果について考えた時、土づくりは大切だと考えるものの、必要以上に実施するのは決して得策でないと今は考えている。

6 販売状況

(1) 出荷方法

市場出荷6割、JA出荷3割、直接販売1割未満である。

(2) 販売の特徴

市場出荷で取引されたトマトやきゅうりは、地元スーパーが自ら「蝦名さんちの野菜」と名付けて販売するなど、高い評価を得ている。



7 課題及び今後の方向

- (1) 今後は施した肥料分をその作型で使い切れるような体制を整えたいと考えている。そのため、土壌分析に関しても「総合分析」「簡易分析」を今以上に有効利用していきたいと考えている。
- (2) 作物の状態をもとにした施肥管理が現場でこまめにできるよう、現場で取り組みやすい簡易分析の体制を整えたいと考えている。